

昭和幻影

— 遠い記憶 —

藤原 寿人

昭和幻影

— 遠い記憶 —

衆議院議員桜木英輔が、秘書の山口とともに、世田谷の各務家を弔問に訪れたのは、父の篤彦が亡くなってから一週間ほど過ぎた日のことだった。

義母の洋子未亡人から、亡父篤彦の遺骨が安置された仏壇の前に案内された桜木は、厳かに焼香したあと、合掌して長いこと頭を垂れ瞑目していたが、身体を起こして、

「……なんとも急なことでしたな、お二人のご心痛のほどはいかばかりかとお察しいたします。各務のような人間と逢いまみえたことは生涯の慶びとするところです、各務にはもう会えないかと思うと残念でなりません、本当に惜しいことをしました」

桜木の言葉聞いて、洋子は思わず目頭を押さえた、隣に座る明も胸に迫るものを覚えた。

桜木が仏壇の前を離れて着いた席からは庭の様子が伺えた、さほど広くはないが、やや寂れた感じに纏められた庭は、いかにも建築家であった篤彦の好みらしく、侘びた落ちつきが感じられた。

肌寒ささえ感じさせる曇りがちな空を背景に、白い花卉を僅かに散り残した枝垂桜が見えていた。「あれは各務が植えさせたものでしたか」と、庭の枝垂桜を指差しながら呟いた。

洋子は俯いていた顔を庭に向けて、

「そう……、もう随分経ちましたわね、あれはこの家を建てたときに京都の植治さんから頂いたも

のですわ、確か」

桜木は、京都の植治、と聞いた時に、もしかしたら、洋子は今になっても、心のなかでは昔の出来事を忘れてはいないのかも知れないと、ふと微かな疑念を感じ洋子の表情を一瞥した。

「もう、あらかた散ってしまいました。まだ散り残した花が幾らか見えますわ」
庭を見ながら、洋子は何事も無いように言った。

その言葉から、洋子は八重のことには拘泥していない、と考えて良さそうだった、例え拘りを持っているにせよ、洋子は篤彦と結ばれ、こうして三十年近い日々を添い遂げたことに違いはないのだから、八重のことを今更氣にする必要はないのだし、明とも仲良くしているのだから、先ほど感じた疑念は杞憂に過ぎないのだろう、と桜木は思い直した。

「そうですね、篤彦とは戦後間もなく知り合い、随分長いこと兄弟同様に付き合ってきました、もう四十年以上になるのですな。

そうそう、ついこの間京都で平田管長と懇談したときの、天竜寺の桜がことのほか見事でした、桜の名所は日本全国どこにでもあります。やはり京都の桜はどこか違いますな、どうしてでしょうかな、やはり歴史ですか」

感に堪えないような桜木の言葉に、明も洋子も顔を上げて桜木を見つめた。

二人の視線がこちらに向いたことを見てとると、

「……そういえば、あの時は、遺傷の話になりましたね」と、

桜木は、予てから懇意にしている京都天竜寺の管長と話題のひとつにもなった遺囑のことなどに言及した後で、

「各務には本当に色々とお世話になりました、志の高い人物だった、そこでだが、もし良かったら追悼の文集でも出してあげたいのだが、奥さん、明さん、如何だろう。

昨年のことだったか、歓談した折に、暇を見つけて書いている、と話に出たことがありました。『それなら、いつか出版してくれるらうね』と、聞いたとき、本人はちゃんと請け負ってくれたのだが、残念なことに各務が亡くなってしまった今となっては、われわれの手で追悼集のひとつも出してあげるのがせめてもの供養だと思つてね」

桜木は洋子と明の顔を交互に見つめながら賛意を促した。

「明さん、良いお話じゃありませんか」

洋子は、桜木議員の勧めなら断る理由もないし、記念に残るものを出版して戴けるなら良い話ではないか、そう思い「お引き受けしましょう」と明にも賛同を促した。

「そうだな、序文は岸さんをお願いしてみよう、と思うんだが、それに財界からも幾人か寄稿をお願いしよう」

桜木は、洋子が賛成してくれたの見て取ると、明にも賛成してくれるよう、重ねてそう告げた。

洋子は、まさか岸元総理に、序文を、そう聞いただけで、建築家だった夫の生前の業績が評価されたように感じて顔を綻ばせた。

明は父がそれほど熱心に何かを書いていたとも思えないが、断る理由も無いのだし、それに義母の嬉しそうな表情を見ると、自分が反対するものでも無いと思ひ、

「分かりました、なにか書き残したものが有るのかも知れないし、お手を煩わせて申し訳ありませんが、宜しくお願いいたします」そう応えると、

「明さんは、しかし、お父さんにそっくりだね、若いころを思い出す、あなたも勤務医として忙しい日々を送っているのだらうと想像がきますよ、僕に力になれることがあれば遠慮は要りませんから、何でも話してくれたら良い、各務と僕は四十年以上も兄弟同様、家族同様に付き合ってきた。君のことは、とても一言では言い尽くせないほど……、でも、こんな立派になったのなら、篤彦も安心して逝ったことだらう」

桜木は、明の顔を見つめて励ましの言葉を述べながら、出版については山口から出版社へ連絡をして進めるようにするから、詳しくは担当者から連絡が行くだろう、それよりも、どうかお力落としのないように、と告げて帰っていった。

明は桜木議員が暇を告げてから、仏壇の引き出しに入れてある会葬者名簿をもう一度取り出してみた、そこに記された大勢の名前に目を通してから、表紙に書かれた「故各務篤彦 昭和六十三年四月十一日享年六十七歳」という文字を見たとき、父はもうこの世にいないのだ、と遺体を眼にしたときには感じるほどの無かった寂寥感を覚えた。

悲しい、という類いの感情ではない、自分でもどう表現して良いのかわからないが、過去に一度

も経験したことのない大きな喪失感だった、ただ明の父に対する感情のなかには自分自身でもはっきりと認識できない部分があることも自覚していた。

「ほんと、明さんは篤彦さんに良く似てるわ、若い頃そっくり」

会葬者名簿を見ていた明に洋子が声をかけた、遣された写真からも篤彦と明の風貌は確かに良く似ていた、そのことを知る何人かの知人は、かならずそのことを口にした。

明が父のことを思い出すように、洋子もまた篤彦との思い出が心に浮んでいたから、どちらからともなく自然に篤彦の思い出話になった。

明には篤彦が生きているときよりも遥かに多くの記憶が湧いてきていた、そして、記憶が鮮明になるほど、今しがた覚えた寂寥感がより強くなっていった。おそらく、洋子にとっても同じような感慨があったのだろう、互いに遠慮がちになるのは、そうした訳があったからに違いない。

明は幼い頃から父と離れて、宇都宮に住む祖母の君江のところに預けられて育った、それは生母の八重が出奔してしまっただけだった。

父は優しくかった、父の思い出で嫌なものなど何ひとつ有りはしない、時々には土産を携えて明のところへ様子を見に来たのだが、いつでも笑顔を見せていた。

では、なぜ、父は明と一緒に暮らそうとしなかったのか、そして、母はどんな理由があって、あの優しい父のもとを出て行ったのか、考えても答えの出るものではない、と知ってはいるのだが、明の心の中ではいつまでも消えることのない疑問だった。

洋子と父の関係ですらかなりの年齢になるまで、自分のなかに明確な像を描くことができなかつたのは、母、という存在とは異なるものを感じていたからなのだろう。やがて、父の配偶者、という認識ができてきたのは何歳になった頃だったのだろうか、覚えてはいない。

今でも洋子を前にしていると親族なのか、知人の範囲を出ないものなのか、お互いの関係について明確には判断できないことも事実だった。その意識が今になるまで親しさを感じながらも、どことなく距離をおいて接してきた理由かもしれない。

洋子にとっても、八重が篤彦のもとを去っていったことと、明を祖母に預けていたことの原因は自分にあるのではないか、という煩悶を長い間抱えていた。

洋子は初めて篤彦に会ったときから、激しい恋心を抱いていた。しかし、篤彦には八重が居ることを知って、一度はその恋を諦めたのだったが、埋もれ火は消えることなく、八重が出奔したことで恋の炎は再び燃え上がった。そして、篤彦と結婚することになるのだが、しかし、洋子は心のどこかで罪の意識を感じ続けていた。

八重から篤彦を奪い取ったわけではないのだし、明が父と離れて育ったことも洋子のせいではないのだが、篤彦に親子として一緒に暮らしたい、という申し出を繰り返しても、篤彦はついに首肯することがなかった。

明が東京の医科大学に入学すると決まったとき、洋子は、長いこと自分を苦しめてきた問題が、これでもう終わったのだ、という安堵とも落胆ともつかぬ気持ちになっていた。

篤彦の真意がどのようなものであったにせよ、子供が成長すればやがて親のもとを離れて行くものだ、という単純な結論に行き着くことでしかないのだと、そのことは仕方のない事だと思いつつも、明を可哀そうと思う気持ちは、洋子のなかにゆらゆらと漂っていた、それが何かのきっかけで、ふと堰を切って溢れてしまうことがあった。

あれは、明が大学生のときに祖母の君江が亡くなり、葬儀のために篤彦と洋子が宇都宮の君江の家を訪れたときのことだった。

洋子は、明を祖母のところに預けてままにしておいたことを詫びながら、明に向かって、

「主人が明さんを嫌っていたとか、大切にしなかったというのは嘘です、そんなことありません、あなたが幼稚園に通っていたころ、早く帰ってきたときには、幼稚園まであなたの様子を見に行っていたことがあります、遠くからあなたをじっと見ていたのです。」

それに、電気機関車を覚えているでしょう、アメリカ製の高価なものでした、銀座の天賞堂とかいいました、そこからわざわざ買ってきたものでした。

あなたを一人にしておくことは辛い事だったに違いないのよ、わたしは一緒に暮らしても構わないと言うのに、何時になっても、けして『うん』とは言わなかった」

篤彦が明の様子を見に来るとき、君江も、世田谷の家で明と一緒に暮らしたほうが良いのではないか、と論ずることがあったようだ。しかし、おそらく篤彦は何もこたえずに黙って聞いていたらしい。そんなやり取りがあったことを洋子も思い出していた。

「あなたのことはいつでも気にかけていました、亡くなるときも『あきら、あきら』って、あなたのことを心配して……」

洋子は、涙をこらえ切れないように目頭を押さえた。

明も、同じような気持ちに駆られた、父親としても優しかったことは良く分っている、篤彦は父としても夫としても欠陥のあった人間だとは思えない、それなのに、なぜ、ああも頑なに明を避けるようにしてきたのだろう。

明の記憶に残る父の篤彦は、たまに遊びに来ても常に寡黙ではあったが、いつもやさしい眼差しで明を見つめていたし、明を抱き上げるときには笑みを浮かべ、心から嬉しそうだった。そのことは今でもよく覚えていて、しかし、ついに一緒に暮そうとは言わなかった。

母の八重も、どんな理由があつて家を出たのだろう、なぜ自分には母親がいなのだろう、と祖母の君江に聞いたのは小学校に入る少し前のことだったと思う。しかしそのときの祖母の悲しそうな顔と、何も言わずに、すつと席を立つて行った、あのときのことを忘れてはいない。

子供心にもそこに触れてはいけない何かがあることを感じ、それ以後は尋ねることを控えてきた。明が小学校に入って暫らくして父は洋子と結婚したが、その後間もなく祖父の各務有常が亡くなってしまったことから、明は祖母と二人だけで暮らすことになった。

篤彦は、何かしら土産を携えて、明のところへ様子を見に訪ねてきた。洋子の言うように時には大きな荷物を車に積んでやって来た。そして、いつも明が眠ってしまうまで、あの家に居た、明が

眠ると、家を出て東京の自宅へと帰っていった。

両親が一緒に住んでいないことを明は考えないようにしてきた、小学校に行けば仲のよい友達が出来たせいもあるのだろうが、友達と遊んでいても自分の家庭に何か欠落しているとは感じなかった。

祖母との生活のなかで何ひとつ不自由なものもなく、辛いと感ずることも無かった、小学校のときから父のはからいで漫画の本や雑誌などは本屋が毎週家まで届けてくれた。

そうした環境に暮らしていたから、本を読むことに馴染んではいたが、どんな理由からだったのか、中学二年生のときに書物を読むことの面白さに目覚めた。

書籍を読むことが日課となり、それは同時に勉強をはじめめる契機ともなった、勉強に必要なものは祖母に話せばなんでも手にはいった、やがて友達と遊びまわることなくなり、勉強と読書に明け暮れる毎日が始まった。

高校に入るとますますその傾向は強くなり、進学校だったこともあるのだろうが廻りの生徒も皆勉強に打ち込んでいたから、良い意味で他人のことには係わり合いを持たなかった、大学に入ってからと同様に他人のことに余計な詮索をする者は居なかった。

大学生活は毎日が面白いように過ぎていった、知的好奇心にかられ、学問を追求するという満ち足りた気持ちで過去を振り返る余裕を与えてはくれなかった。

三年生の時に祖母が亡くなった、しかし父との関係には何の変化も生じなかった。父は明のその

ときの気持ちや今後の計画を聞いてから、不足しているものや希望することがあれば教えて欲しい、と言ひ、明の言うことを黙つて聞いていたが、自分の進む道を進むが良い、という意味のことを言つた。ただ、それ以後は年に数回明のところへ連絡が来て、明を呼び出し何かしら話をするようになったことが変化と言へば言えるだろう。

父と初めて、本当に話らしい話をしたのは、あれは大学を終え研修医として大学病院に勤務するようになり、医師国家試験に合格した直後のことだった。

医師国家試験に合格したときの、心の底から嬉しさが込み上げて来るような、あの時の心持ちは今でも覚えてゐる。あの時は父も同じように心から喜んでくれていた、そのことが一層心に深く刻まれたからだろう。

それまでは父と話しあうことに慣れてはいなかった、けして嫌いではなかったが、ふたりの間ほどの様な絆で結ばれているのか理解することができなかった。しかし、その父が心から嬉しそうにしているとき、自分の感じている嬉しさと相まって、お互いの心が通い合ったような喜びを感じる事が出来たのだった。

そのとき初めてわれわれは父と子なのだ、血のつながった親子なのだという実感が湧いた。

大学付属病院での初期臨床研修を終えて地方の病院勤務から再び大学付属病院に戻つて、さらに地方に派遣され現在に至るまで、只ひとつのことを除いては、これという問題もなく互いにうまく付き合つてきたと思ふ。

そう、ただひとつのこと、それは明の母、八重のことになる、父も親族の誰もが、けして触れようとはしなかった。明も、母という存在に触れてはならない何かがあるに違いない、と思いがら、やはり父に聞くことができなかった。

父の書いていたものがどのような内容なのか、明には判断がつかないが、おそらく私的なものではないだろう、父がそうした類のものを書くとは思えない。

母のことはやはり聞いておくべきだった、父が亡くなった今となつては、母のことを聞く機会を持たなかったことが悔やまれた。

父とは四十年以上にわたつて家族同様に付き合ってきたと桜木議員は言うが、確かに桜木との交友が並々ならぬものであることは、父との短い会話のなかからも理解していた。それに比べて、自分と父の間には、普通の家庭に暮らしていれば体験するであろう子供時代、反抗期、あるいは詰まらない些細な諍いや家庭内の不和などの、当たり前前に生じる親子関係は何ひとつとして無かった。

明は仏壇に飾られた父の写真を見上げ、祖母と暮らした日々、大学に入学してからの交友関係に恵まれた学生生活、現在の医師としての生活に至るまで、様々な記憶の断片が脳裏に浮んで、そして消えていった。父との関係は、もうこれで終わりなのだ、これで血のつながりを持った人間は一人もいないのだ、そう考えると、幽かな後悔とともに言いようのない喪失感に襲われた。